

建築家 通信

2019.3.31
vol.119

公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 長野地域会
JIA長野県クラブ

<http://www.jia-nagano.com>
E-mail info@jia-nagano.com

きづく・きづく

MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO主宰 / 芝浦工業大学 教授 原田 真宏



道の駅ましこ



学生卒業設計コンクール



文化講演会

この文章を書いている今日は2月28日。今年は閏年(うるうどし)ではないから、明日から3月で今年度もおしまい。その翌月になれば、大学には新入生が、スタジオにはトライアルの新人が入ってくる。当然、皆それぞれにキャラクターが異なっていて面白いのだけれど、トライアルからの人選はスタジオの将来を左右するような重大事だから、面白がっているだけではまずい。マウントフジの場合は大体3ヶ月間、一緒に仕事していく中で、仲間になってもらうか見定めていくことになる。

建築の、特に設計の仕事をしていく上で大切なことはいろいろあるけれど、その一つの表現として「きづく」と「きづく」があるんじゃないかと思っている。声に出せば同じ音だが、それぞれ「築く」と「気づく」で、相互に関係しつつも異なる能力だ。

「きづく:築く」は、具体的には物質を自然科学の法則に則って組み上げていくことに関する能力であり、抽象的には思考に構造を与え系統立った論理的全体へとまとめ上げることで他者に説明可能にしていく能力である。これらは社会力による自然科学的活動である建築を高いクオリティで実現していくために必須であって、「構築力」と呼ばれるものだ。構築度の高さは、アウトプットのレベルに直結するものだから、これは当然、重視する資質である。

「きづく:気づく」は、世界を理解する「知覚の解像度」のようなものである。世界は無限の情報を持っていて、どこまでそれに気づけるか、はデザインをする上で非常に重要であることは改めて指摘するまでもない。それは分かりやすく言語化・数値化された情報だけではない。素材や場所が囁く小さくとも豊かな声や、施主や作り手を含め関わる人の言葉の奥にある言外のニュアンスなども、良いデザインを見出し実現するためには知覚できなければならない。この気づきの解像度もまた、しっかりと見定めたポイントになる。

しかし、この「築く」と「気づく」は1人格の中で両立していないことが多い。特に新人の時分には難しいのかもしれない、としばしば

ば思う。

一見、高い構築度の作品や論述がポートフォリオに入っていて、「築く」に秀でた能力を持っているかのように見える新人がいたとしよう。しかし、その「構築度の高さ」は世界の「情報量の少なさ」故に成立しているのかもしれない。世界への「気づき」が少なければ問題が簡単なのだから「築き」の純度が上がるのは当然で、得てして賢い(と言われる)学生ほど考える対象範囲を適切に(あるいは過剰に)絞ることができるものだ。彼には優先して「築き」のレベルを達成しようとする意志がある。

逆に、世界への「気づき」の感度が高すぎるために、「築き」のレベルが低く留まってしまっている者もいる。適切に世界の気づきの対象範囲を設定できないのだから、それは能力が低いのだと言ってもええそれまでだが、本人にとってはどれも大切な情報で取捨選択などしようもないのだろう。意識的かどうかは分からないが、この者には「気づき」への誠実さがあるのである。気づきの質や量は美しく豊かな建築が成り立つ為の、いわば土壌となる。

だから僕はそれぞれの成長のために、「築く」に意識の高い新人にはそれを保持しながらも、世界への「気づき」へと自らを開くように促すし、高感度の「気づき」による大量な情報の海で溺れそうな者には「築く」意思を持つように導こうとしている。「小さな気づき」を前提とした「高い築き」でも、「大きな気づき」による「低い築き」でも共に不足だ。おおらかに自らを世界に開くことで深い「気づき」を得ながら、そこに自らの足で立って力強く「築く」ことが、大切なのだ。

きづく、きづく、こと。

それが建築家として、他者にも、そして自分にも求める資質なのである。



2月16・17日の両日、松本市美術館においてJIA長野県クラブの第13回建築祭が行われました。まずは、ご多忙の中、講演と審査委員長をお願いした原田真宏さんを始め、審査委員の藤沼傑



ギャラリートーク

さん、大橋秀三さんにあらためて感謝申し上げます。そして、長野県学生卒業設計コンクールに参加頂いた、池田工業高等学校、飯田OIDE長姫高等学校、上田千曲高等学校、長野工業高等学校の34作品、上田情報ビジネス専門学校の12作品、信州大学の11作品を出展して頂いた学生の皆様の力作は、賞の如何を問わずいづれも素晴らしく、建築祭を盛り上げて頂いた事を嬉しく思います。

また今年も、会場に足を運んで頂いた市民の方々から市民審査の投票を頂き、市民賞も授与されました。建築に関心を持って熱心にご覧頂いた市民の皆様、市民賞を授与頂いた松本市美術館に感謝申し上げますと共に、市民の方々に建築文化を広げる事がJIAの理念のひとつであり、その様な場を提供できたことは、建築祭の大きな意義の

ひとつと感じています。

また本年度は、建築祭のサブタイトルにある「ひと、まち、建築 見つめようくらしの場」を掘り下げる為に、文化講演会、卒業設計コンクールのメインプログラムに加え、JIA長野県クラブ会員が学生作品を解説するギャラリートークを企画しました。其々の学生作品を鑑賞する中では、造形の完成度と共にその作品の背景となる社会テーマも重要です。コンクール審査とは違った雰囲気の中での、JIA長野県クラブ会員の客観的な作品解説とディスカッションには、作者自身も気づかなかった視点もあり、参加した市民や学生に向けて作品に対する関心を広げる事が出来たと感じています。

最後に、一年目の不慣れな委員長でしたが、準備と当日のサポートをしてくださった事業委員、JIA長野県クラブ会員、参加校の教員の皆様、松本市美術館のご協力があった建築祭を楽しく終えることが出来ました。有難うございました。



高校の部 受賞者

長野県学生卒業設計コンクール 受賞者の声

大学生 金賞

信州大学 工学部建築学科 秋山 由季

この度は、長野県卒業設計コンクールで金賞と市民賞を受賞できたことをとても嬉しく思うと同時に、このような機会を頂いたことを心から感謝申し上げます。卒業設計では、埼玉県深谷市の日本煉瓦製造株式会社跡地に、レンガの製造を生業とするまちを提案しました。トロッコ、残された遺構、レンガ製造施設、住宅の4つの要素をもとにトロッコのレールが敷地全体を円環状に巡るような計画をしました。約1年間同じ敷地に向き合ってきて、うまくいかない時や苦しい時もありましたが、設計すること、図面を描くこと、模型を作ることが大好きで、楽しんで仕方なかったのも、今回その熱意が伝わったのだと思うと嬉しいです。まだまだ不十分な部分や納得していない部分がたくさんあるので、今後もブラッシュアップを続けていきたいです。表彰式で原田さんが仰っていたように、自分の足で世界に立ち、問いを見つけ、解決し評価していけるように、これからも真摯に建築に向き合っていきたいと思っております。



大学の部 受賞者・前列中央が秋山さん

金賞

上田情報ビジネス専門学校 建築学科インテリア住環境コース2年 柳沢 杏果

この度は長野県学生卒業設計コンクールで専門学校の部での受賞を頂きました事に、感謝を申し上げます。卒業設計に取り組むにあたり、日常に“芸術”というエッセンスを加える事に焦点を置き、体験を目的とした施設を設計しました。日常を機能的にこなすだけでなく、無くてもいいけれどあったらいいな、の暮らしを考えてみました。芸術に興味が無い人にどうやって興味を持って貰うかという問題が大きな壁となって現れた時に、過去を思い返すと今まで自分が経験してきた事と一緒に絵を描いてきた友人達との会話の中に解決策がありました。今回の卒業設計の原点とも言えるものは、多くの方の支えがあったからこそ生まれた作品だと感じています。芸術の魅力を伝える為に、学んできた建築の力を借りて現代の日本人の生活が今よりもっと豊かになる事を願いながら。

今回の受賞を機に、地元にも貢献できるよう、これからも精進していきたいと思っております。この度は誠にありがとうございました。



専門学校の部 受賞者・前列左から2人目が柳沢さん

高校の部

金賞	北村 美結	共存 ～命を繋ぐ場～
銀賞	岩淵 蓮也	こどもの営巣 ～自然で包むこどもの心～
銅賞	玉城 稔葉	職人の町
奨励賞	近藤直、妹尾大輝、寺田悠希、原龍之介、矢澤篤	(飯田OIDE長姫高等学校) 飯田駅裏デザインプロジェクト ～人の集まり方を創造して～
奨励賞	宮崎 星来	Nakagawa☆Milky way ～中川ショッピングセンター再開発計画～

専門学校の部

金賞	柳沢 杏果	よあけ
銀賞	保科 百花	森の詩
銀賞	和田佳菜恵	B-arc
奨励賞	西澤 崇人	マークル・オフィス

大学の部

金賞	秋山 由季	レンガ巡るまち 日本煉瓦製造跡地活用計画
銀賞	水木 直人	電農都市 郊外におけるエネルギー循環型農村の設計提案
銅賞	伊藤 一生	ウラヤマ路地ック 斜面住宅地の減築と再編
奨励賞	糸井 梓	溶けあう建築 ～自然光と湧水を生かした地域のための高齢者施設～
奨励賞	上田 春彦	迎るかけら 断片による里沼の再生

開催したイベント	2月16日(土)・・・建築祭 文化講演会・ギャラリートーク
	2月17日(日)・・・建築祭 長野県学生卒業設計コンクール
	3月5日(火)・・・まちづくり委員会 フィールドワーク
	3月15日(金)・・・交流委員会 仕事を語る会④

今後の行事予定	3月30日(土)・・・『信州の建築家とつくる家』第14集発行
	4月10日(水)・・・交流委員会×広報委員会 出版レビュー
	4月19日(金)・・・2019年度通常総会

編集後記
建築祭の文化講演会で、講師の原田さんから、よい建築とは「市民の要求を適える、第二の自然である。」(ゲーテ)というお話がありました。豊かな自然に囲まれた信州で活動する私達には、とても印象に残る言葉だったのではないのでしょうか。ようやく長い冬が終わりを告げ、季節は春です。氏の建築を訪ねてみるのもいいですね。
..... 竹内祐一
皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

JIA
公益社団法人日本建築家協会
The Japan Institute of Architects

編集人/竹内 祐一 発行人/荒井 洋
発行所/JIA長野県クラブ
長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内
TEL : 026-232-3897 FAX : 026-232-5303
<http://www.jia-nagano.com>
E-mail info@jia-nagano.com